

【研究主題】 ひらがなの読み書きが苦手な子どもたちの早期発見・早期支援のために行った取組

【副題】 ～多層指導モデルMIMを活用した低学年におけるひらがな指導方法の検討～

【学校・団体名】 滋賀県大津市立坂本小学校

【役職名・氏名】 教諭 景山 佳矢

1. はじめに

希望に満ちた明るい笑顔で小学校に入学してきた子どもたちの中に、ひらがな学習が進むにつれて表情が暗くなる子がいる。「ひらがなをすらすらと読めない」「読むのに時間がかかる」「ひらがなをなかなか覚えられない」「きれいにひらがなを書けず、お直しがたくさんある」「ひらがなを書くのに時間がかかる」等、小学校での学習の初めからつまずきを感じ学習意欲が低下してしまう子どもが毎年一定数いるように感じられる。

ひらがなの学習は、全ての学習の基礎であり、ひらがな読み書きの習得に時間がかかると、国語だけでなく算数等他の教科の理解にも影響を及ぼす。

ひらがなは1年生1学期に学習するようにカリキュラムが設定されている。しかし、この期間で習得することが難しい子がいる。そのような子をできるだけ早期に発見し、早期に指導・支援することがひらがなの読み書き習得に必要であり、その指導・支援がその子の今後の学力に大きく影響すると考える。

2. ひらがな読み書きの習得に必要な力

ひらがなの習得に必要な力はこれまでの研究で「音韻認識力」であることが分かっている。「音韻認識」とは「ひとまとまりのことば(単語)がいくつかの音のかたまりに分かれるかを認識する力」(竹田・村井, 2010)である。ひらがな46音(以下、清音とする)は、文字と音が1対1対応になっているため比較的覚えやすいとされる。例えば「みかん」は「み」「か」「ん」という3つの音で構成されている。しかし、ひらがなには清音の他に濁音(「が」等「ㇿ」がつく文字)や半濁音(「ぱ」等「ㇾ」がつく文字)があり、さらに拗音、長音、拗長音、促音、拗促音と呼ばれる特殊音節がある。拗音は「しゅん」等小さい「や・ゆ・よ」、長音は「ぶどう」等伸ばす音、拗長音は「やきゅう」等小さい「や・ゆ・よ」と伸ばす音を合わせた音、促音は「きつぷ」等小さい「っ」、拗促音は「しゅっくり」等小さい「や・ゆ・よ」と小さい「っ」を合わせた音である。

音韻認識力に弱さがあると、この特殊音節の習得に困難さを感じたり、ひらがなで書かれた言葉を読むこ

とに時間がかかったりする。

学習指導要領では4月下旬からひらがなの清音の学習が始まり、5月中旬に濁音・半濁音(2時間配当)5月下旬に促音(2時間配当)、6月上旬に長音(2時間配当)、6月中旬に拗音(2時間配当)を学習することになっている。拗長音や拗促音の学習時間は設定されておらず、6月中旬にひらがなの学習が終わってしまう。そしてその学習期間中である5月上旬には「ことばさがし」や「はなのみち」という読み物教材も含まれている。音韻認識力の弱い子どもは、言葉をまとまりとして捉えることも難しいので、「ことばさがし」や「はなのみち」等の単元でも困難を感じることもなるだろう。

正常な発達であれば、音韻認識力は小学校入学までに高まっており、入学までに自然とひらがなの読み書きがある程度習得できるようになっている。そのため、ひらがなの学習時間は入学後4~6月の3か月という短期間の学習時間の設定となっていると思われる。しかし、ある一定数の子どもは入学までに音韻認識力が十分に高まっていないためか、入学後に学習活動が始まると一気にその困難さが顕著になってしまい、学習意欲が低下すると考える。

そこで、本研究では、令和5年度本校に入学した1年生を対象に、2年間にわたってひらがなの習得状況を追った。まずは、音韻認識力が弱い子どもでも取り組みやすいとされている「多層指導モデルMIM」を取り入れ、1学期のひらがな学習において通常学級で指導を行った。次に、ひらがなの学習指導が終了した1学期以降も通常学級で取り組める方法を考え、ひらがな学習を継続した。一方で、ひらがなの習得が困難だと思われる児童については10月中旬頃から個別学習や小集団での指導を行った。また、ひらがな習得の実態把握をするためのテストを1年生9月、12月、2年生7月の計3回行った。

3. 多層指導モデルMIMを用いた指導

「多層指導モデルMIM(ミム)」(以下、MIM指導法とする)とは、海津亜希子先生が考案された、通常学級に

の学習タイム等各学級の実態に応じて時間を設けて取り組み続けることができた。

特殊音節を含む言葉のある程度書き続けた後、2学期後半頃からは、「すきな果物を書こう」と言葉集めをしたり、児童同士で言葉を言い合って聴写したり、給食メニューを書いたりと様々な言葉を書いてひらがなの学習を続けた。こうしてたくさんの言葉を書く学習は語彙力を高める学習にもつながっていると思われる。

国語のノートを活用してもよかったのだが、2学期の初めには、学習の理解程度の差が大きくなっていることから、国語ノートの進み具合にも差が開いてしまっている。そのため、ことばを書くためのノートを1冊用意することで学習を始めるスタートラインをそろえることにした。「ことばのノート」が1冊あると、いつでもすぐに「乗り物をたくさん書こう」「しりとりをどんどん書こう」等の指示を出すだけで、ひらがなの学習が行えるという利点もあった。

5. 個別学習「ぐんぐん教室」の活用

本校には、通常学級に在籍している児童の中で特に学習に困難を感じている児童は、保護者の了解を得て週1回の個別学習を行っている。主に1・2年生は「国語科」でひらがなや漢字の読み書きの学習補充を行い、3年生以上では「算数科」で学習中の単元に関連した学習補充を行っている。この個別学習を「ぐんぐん教室」と呼んでいる。

1学期のMIM指導法を用いても、2学期の「ことばのノート」を活用した指導でも伸び悩んだ児童5名を3rdステージとした「ぐんぐん教室」の対象として抽出した。「ぐんぐん教室」では1人の教員に対して2～3名の児童となるようにし、清音の読み書きやMIM指導法を用いた特殊音節の指導をもう一度行った。時にはかるたやすごろく等言葉遊びを行ったり、運筆力の弱い子には迷路を行ったり等通常学級では取り組みにくい学習活動も取り入れた。学習意欲の低下が見られた子もいたが、「ぐんぐん教室」は楽しいようで、毎週良い笑顔で学習していた。

6. ひらがなを書く力の実態把握

子ども達のひらがなを書く力の実態把握をするため、「ひらがな単語聴写テスト」(竹田・村井, 2010)を1年生9月、12月、2年生7月の計3回行った。このテストは30問の聞き取った言葉を書きとっていくものであり、清音・濁音・半濁音・撥音(「ん」)の他に、特殊音節(拗音・長音・拗長音・促音・拗促音)がそれぞれ5

音ずつ含まれている(図2)。それら特殊音節の間違い個数に応じて「困難群」「要注意群」「学年相応群」の3つに群分けすることとした(表1)。

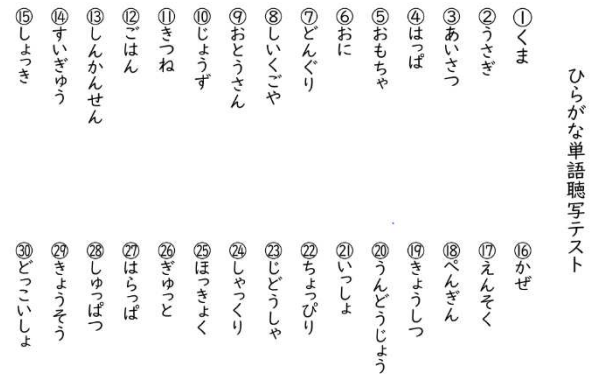


図2 ひらがな単語聴写テストの内容

表1 誤数による群分け(特殊音節25個中)

	学年相応群	要注意群	困難群
1年	9以下	10～13	14以上
2年	5以下	6～8	9以上

対象児童：坂本小学校1年生(令和5年度入学児童)

117名

実施方法：各学級で集団実施した。担任がひらがなの言葉(30問)を読み上げ児童が聴写した。3回までは繰り返して良いこととした。

実施時期：1回目 2023年9月上旬

2回目 2023年12月中旬

3回目 2024年7月上旬

結果：

まず、1年生9月に行ったテスト結果を過去2年分の同時期のテスト結果と比べてみた。

対象児童が1年生9月に行ったテストでは「困難群」約38%、「要注意群」約11%、「学年相応群」約51%という結果であった。その前年度(令和4年度入学児童)同時期に行った同じテストでは「困難群」約25%、「要注意群」約7%、「学年相応群」約68%、前々年度(令和3年度入学児童)同時期に行った同じテストでは「困難群」約20%、「要注意群」約15%、「学年相応群」約64%であり、過去2年間の結果と比べて対象児童はひらがなの習得率が悪いことがわかった(図3)。

次に、対象児童のひらがな習得の変化を見てみた。

1年生9月に行ったテストでは「困難群」約38%、「要

注意群」約11%、「学年相応群」約51%という結果であったが、12月に行ったテストでは、「困難群」約14%、「要注意群」約12%、「学年相応群」約74%と学年相応にひらがなが書ける児童が増えた。そして、2年生7月には「困難群」約7%、「要注意群」約8%、「学年相応群」約85%となり、さらに習得率が上がった(図4)。

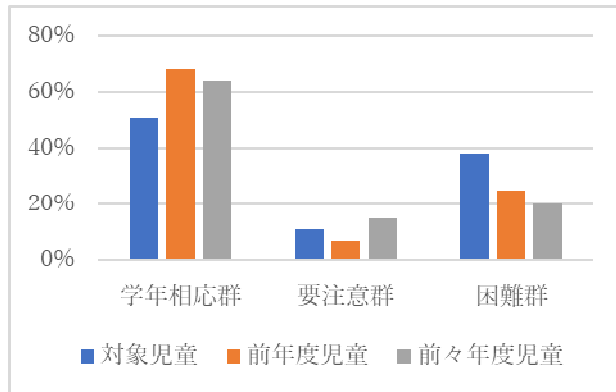


図3 1年生9月に実施したひらがな聴写テスト結果 過去2年間の結果との比較

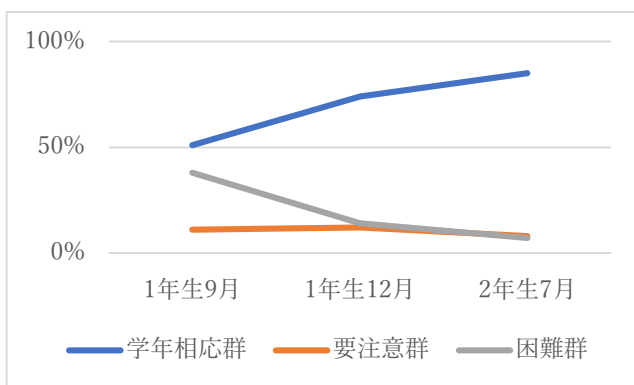


図4 ひらがな習得の変化

7. 考察と課題

まず、1年生9月に行ったひらがな単語聴写テストの結果を3年間分比較してみると、対象児童のひらがな習得率が低いことが分かった。「困難群」と「要注意群」を合わせると約48%となり、ほぼ半数の児童がひらがなの習得に困難を感じていることとなる。前年度や前々年度でも「困難群」「要注意群」を合わせて32%(前年度)35%(前々年度)であったので約3分の1の児童がひらがな習得に困難を感じていると危惧したが、その心配を上回る結果となり、早急に学年を上げて対処する必要性を感じた。そのため、前年度まで2ndステージとして行ってきた担任による通常学級内での個別の支援をやめ、学年全体で取り組むこととした。

今回、対象児童のひらがな習得率が低かったことは、担任が授業をしているだけではわかりえなかったことだと思われる。なぜなら1年生担任は毎年変わってい

るため、昨年度と比較検討することが難しいからである。しかし、「ひらがな単語聴写テスト」のように基準となるテストを毎年同時期に実施することを決めておくとその検討は可能となる。この基準となるテストはできるだけ手軽にできるものが良いと思われる。今回実施した「ひらがな単語聴写テスト」は問題が30問あるため、ひらがなを書くことが困難な児童にとっては苦痛を感じるようで、毎年乱暴に殴り書きをした答案用紙を数枚見かける。できればもう少し問題数が少ないものが良いかと思うが、このテストには「困難群」等群分けをする基準が設けられていることがわかりやすい。問題数の少ないテストとしては湖南省市ことばの教室が作成した10問テストがある。こちらは群分けの基準はないが、より手軽にテストができるので、指導の合間により細かく習得度を確認するために活用することができる。

次に、対象児童のひらがな習得の変化についてである。2年生7月のテストが前年度は全ての学級で行うことができなかったため、前々年度との比較を行ってみたいところ、「学年相応群」の割合が対象児童は1年生9月から2年生7月までに34%上がっているのに対し、前々年度では9%の上昇にとどまっていた。

私はこのように対象児童のひらがな習得率が大きく上がった理由としてMIM指導法で音韻認識力を高めながらひらがな指導を行ったことと、「ことばのノート」の活用にあると考えている。2学期以降も継続して毎日少しずつひらがな単語を書き続けたことによって、特殊音節のルールを理解しひらがなの言葉を書けるようになったのではないだろうか。実際にはまだ「困難群」に8名おり、このうち5名は「ぐんぐん教室」に参加していた児童である。個々に見ると伸びは見られるものの、学年相応レベルまで伸びることは難しかった。この「困難群」8名や「要注意群」9名について、今後どのような支援ができるか考えていきたい。

8. 参考文献

- 海津亜希子編著(2010)「多層指導モデルMIM:読みのアセスメント・指導パッケージ」Gakken
- 竹田契一監修 村井敏宏著(2010)「通常の学級でやさしい学び支援2巻 読み書きが苦手な子どもへの〈つまりき〉支援ワーク」明治図書
- 湖南省市ことばの教室(2018)「おとまるトリオのよみ・かきひろば」